



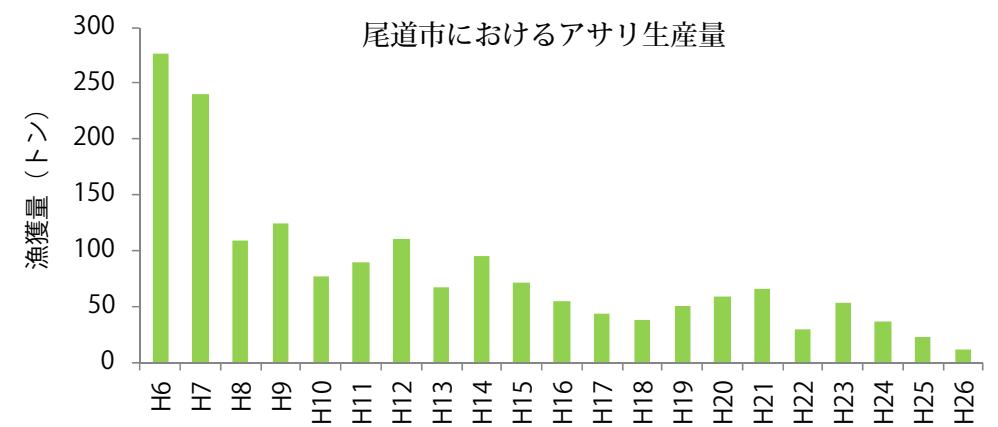
浦島地区について

浦島地区は、尾道市の南東部の浦崎町と百島町にある。
地区の産業は、農業や漁業を主体としており、漁業はアサリや刺網、小型定置網などを営んでいる。
地区の海岸線には、国や県が造成した人工干潟が複数あるのが特徴で、そこではアサリを中心とした漁業が行われている。



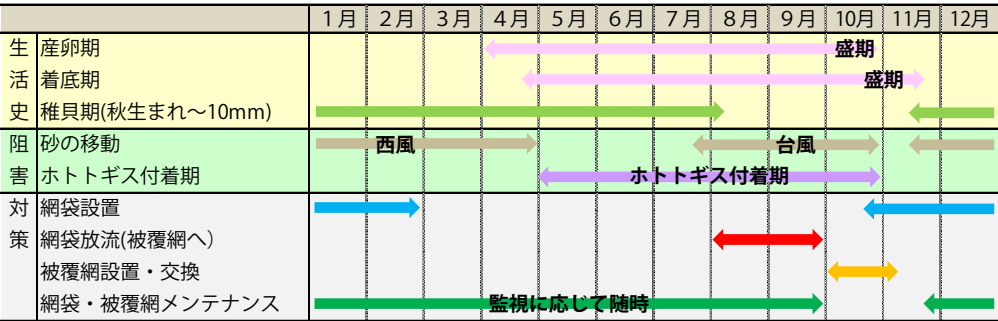
干潟の現状

かつて浦島地区の干潟は、大きな河川がないことから、沖出しの距離が小さく、傾斜がきつかった。そのため、干潟生産力の向上を目的に、沖出し距離を延長した人工干潟が複数造成された。
これら造成された干潟は、アサリ等の二枚貝の生息場、魚介類等の産卵・育成場として機能しており、地区の基幹産業である水産業の重要な生産場となっていた。
しかし、現在、①干潟における砂の移動、②クロダイ・エイ類等による二枚貝の食害、③近隣の尾道市にあるアサリの一大生産地「山波の洲」における資源量減少による稚貝供給量の低下によって、アサリ資源が大きく減少しており、干潟の生産力や生物多様性機能の劣化が懸念されている。



アサリ資源再生のポイントと活動方針

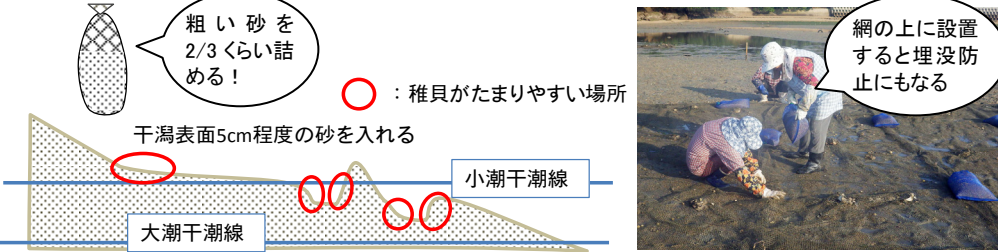
アサリ資源の再生を目的に、平成 25 年に「広島県東部アサリ協議会（浦島地区）」を結成した。
当該地区におけるアサリ資源再生のポイントは、①効果的な稚貝の確保、②砂の移動による稚貝の逸散防止、③クロダイ・エイ類の食害対策である。そこで、「網袋」を活用した稚貝の確保・保護、「被覆網」を用いた食害・逸散対策を、以下のアサリの生活史及び季節的な阻害要因を踏まえて計画的に取り組むことにした。



実践！アサリを育む干潟を目指して

1) アサリ稚貝の確保・保護
浮遊するアサリ幼生や波浪等で砂ごと巻き上げられ飛来する初期稚貝を確保する目的で、網袋を着底盛期の 10 月末～2 月の期間中に設置した。網袋の作成方法・設置のポイントは、次のとおりである。

ポイント1	袋の中に入れる材料は、現地の干潟の粗い砂 (2mm) や細かい礫 (2～4mm) がベスト
ポイント2	袋網に入れる砂は、稚貝が多く集積するような場所のもの ※自然に網に入る稚貝だけを確保するだけでなく、既に着底しているであろう稚貝も確保する
ポイント3	袋網の一部は、被覆網を固定するための重しとして網の縁に設置。袋網の埋没防止にもつながる
ポイント4	稚貝が殻長 1cm～2cm 程度まで育つ約 1 年後に、被覆網の中に砂ごと移植



2) 被覆網による食害・逸散対策
地区の干潟は、クロダイなどの食害を強く受ける。また、砂が移動する場所も多く、それによって稚貝が逸散し、消失する。そこで、これらの対策として、被覆網を干潟上に設置し、アサリ資源の再生を促す。被覆網設置などに係るポイントは、以下のとおりである。

ポイント1	メンテナンス (交換等) しやすい小型の網 (2m×4m程度) を主に用いる
ポイント2	設置は、稚貝はいるが、親貝が「いない」もしくは「僅かにいる」場所
ポイント3	干潟のアサリ等を面的に保護するために、複数の小型の被覆網を連結して張る
ポイント4	放置すると被覆網下のアサリが高密度になり生残率が低下する恐れがあるので、殻長 30mm を超える個体を年 1 回程度間引く



取り組みの成果と今後の課題

活動場所の干潟のうち成績が良かった観音地区の網袋による稚貝確保・保護の成果は、平成 27 年度の結果で 1 袋あたり平均 353 個、総重量 582g にのぼった (27 年 2 月設置～同年 10 月回収)。また、平成 29 年 5 月に行った被覆網下のアサリ密度は 1m² あたり平均 372 個で、網の外より 2.7 倍高く且つ殻長 25mm 以上の大型個体も多く、網袋と被覆網を併用した本活動の効果が示された。

観音地区では、今年度、約 10 年ぶりに殻長 30mm 前後の大型貝が 846kg 収穫され、浜に笑顔が溢れた。今後は、砂の移動が大きく、観音地区のように大きな成果が得られていない干潟で、効率良く資源再生する方法を検討する予定である。

